

非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

金

【海外】

1. 価格推移

2月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,682.35 (24日)	1,552.20 (5日)
国内建値(円/g)	: 5,907 (25日)	5,498 (5日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 109.52 (3日)	113.11 (21日)

2月の海外金相場は、3日に1,578.85\$/toz(トロイオンス)と\$1,500台後半でスタート、上旬では米国の景況感改善などで投資家が再びリスク志向を高め、内外の株価が反発、高値で推移していた安全資産とされる金に売りが出たため、一時\$1,550水準まで沈下した。その後、中旬にかけては、その\$1,550近辺を底として、新型肺炎の影響による世界景気の先行き不透明感が高まるなか、安全資産とされる金先物への買いの勢いが強まったことからほぼ一本調子で続伸、19日には2013年3月以来の\$1,600台に到達した。下旬においても、その高値圏での展開が崩壊することはなく、週明けの24日には新型肺炎の世界的なまん延による景気の先行き不透明感が一気に高まったため、\$1,682.35と2013年1月以来7年1か月ぶりの高値をつけた。新型肺炎への警戒感からリスク回避の際の受け皿となりやすい金市場に買いが集中した。その後、その水準を高値とみた利益確定の売りが大量に出て大幅続落、28日には\$1,609.85と\$1,600際まで下げて越月した。

2. 為替相場推移

2月の為替相場は、3日に\$1=109.52円とやや円が買われてスタート、初旬は新型肺炎の感染拡大を警戒して「低リスク通貨」とされる円に買いが入り上昇したが、上旬にかけては、中国の経済対策への期待を背景に日米の株式相場が上昇したことで、逆に円を売る動きが加速、概ね\$1=110~111円での値動きとなった。中旬においても、新型肺炎への警戒感がありながらも、同水準での動きが続いた。この背景には、米長期金利の上昇や中国の対米関税の一部引き下げ発表、米経済指標の改善などドルに有利に働く要因があった。さらに、20日には米国の景気指標が市場予想を上回る結果が相次ぎ、米景気の堅調さを意識した円売り・ドル買いが出たことや新型肺炎による経済への影響が限定的との見方が市場に浸透したことで円が続落、

\$1=112.28 円をつけると、21 日には\$1=113.11 円まで円が後退、前の年の 4 月以来 10 か月ぶりの円安・ドル高水準となった。ところが、下旬入りすると、新型肺炎が世界経済を下押しするとの警戒感が強まり、米株式相場が大幅に下落したことでドルが急落、連休明け後の 25 日には\$1=111 円水準へ円が復帰、その後も米長期金利の低下などのドル安要因も出たことで、月末にかけては、円高・ドル安基調が続いた。28 日には\$1=110.43 円をつけて越月した。

2 月の円の対ユーロでの動きは、発表されたドイツの GDP が低迷したことで、円は中旬にかけて€1=120 円水準まで買われた。その後ユーロが反発し円が小安く推移したが、月末ではドル安に引きずられる形で、ユーロも下げ€1=121 円での小動きとなった。

【国内】

1. 建値推移

2 月の国内金山元建値は 3 日に 5,563 円/g(グラム)と前月につけた最高値を軽く上回ってスタート、5 日には今月の最安値をつけるものの、その後はほぼ一本調子に続伸した。17 日に 5,600 円台、20 日に 5,700 円台、翌 21 日には 5,800 円台に達し、連休明けの 25 日には、5,907 円と 5,900 円台をつけるとともに、月間最高値を記録した。これらは、いずれも過去最高値(6,470 円)をつけた 1980 年(昭和 55 年)1 月以来の高値となった。月末では、利食い売りによる海外相場の下落により価格水準を下げたものの、28 日にも 5,802 円と 5,800 円台の大台を保って越月した。

2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2020 年 1 月分=令和 2 年 1 月分)

生産 : 9,771 kg (前月比 12.3%減、前年比 15.3%減)

出荷 : 11,767 kg (前月比 22.9%増、前年比 6.1%増)

在庫 : 3,644 kg (前月比 35.4%減、前年比 43.1%減)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

1 月の生産は前月比、前年同月比とも減。出荷は円建て価格上昇にもかかわらず、前月比大幅増、前年同月比も 2 か月連続の増。在庫は出荷増から前月比、前年同月比とも大幅減。前年同月比は 12 か月連続の減。これは、2015(平成 27)年 6 月の 3,544 kg 以来の低水準。

銅

【海外】

2020 年 2 月の LME 銅相場は新型コロナウイルス感染が日増しに拡大するなかを

前年 8 月以来の安値圏となる\$5,500~5,700/t 圏を低迷推移した。

新型コロナウイルスの発生源の中国では政府が感染拡大防止策として広範な移動制限や企業閉鎖など規制を強化する一方、経済への悪影響を緩和すべく、人民銀行は大規模な流動性供給を発動した。世界保健機関(WHO)は 11 日、正式名称を「COVID-19」に決定した。ところが、感染は中国以外にイタリア、イラン、韓国など世界各地で拡大した。こうしたなか、投資家は一斉にリスクオフモードに転じ「セーフヘブン」に逃避したことから、株安が世界的に連鎖した。米国ダウ工業株平均は 24 日から暴落しはじめ、27 日には 1,190.95 ポイントと過去最大の下げを記録、28 日の終値は 25,409 ポイントと 7 営業日連続の下落で、週間(5 営業日)での下げ幅は 2,583 ポイントと 2008 年のリーマンショック後を超えて過去最大となった。一方で、米国の 10 年債利回りは 1.14%と過去最低を更新し、金先物は 2013 年 3 月以来となる \$1,600/toz 台に乗せた。27 日現在、中国本土の感染者数は 78 千人以上、うち死者数は 2,740 人、中国以外の感染者数は 3.6 千人以上に達した。こうしたなか、WHO は 28 日、世界的に広がる危険度を「非常に高い」に引き上げた。

需給動向については、国際銅研究会によれば、2019 年 1~11 月の世界の銅鉱石生産は 18,642 千t、地金生産は 21,898 千t、消費は 22,282 千tでいずれも前年同期比ほぼ横ばいとなった。地金需給バランスは▲408 千tから▲384 千tへと引き続き供給不足で推移した。報告在庫は 9.3%増の 1,305 千t、在庫/消費比率は 2.3 週間から 2.6 週間に上昇した。

鉱石生産の内訳は精鉱が 0.5%、SXEW は 1%減少した。国別には、チリが鉱石品位低下と一部の供給障害を主因に 1%減少した。インドネシアはグラスベルグ、バツーヒジャウ鉱山の採掘鉱体の移行に伴う一時的な減産により 46%減少した。コンゴ民主共和国(DRC)、ザンビアはSXEW 鉱山の一時的な操業停止、計画減産、一部鉱山の操業トラブルで 3%減少した。オーストラリア、中国、メキシコ、ペルー、米国は前年の供給障害による減産の反動で増加した。パナマはコブレパナマ鉱山が新規稼働した。地域別には、北米が 4%、ラテンアメリカは 1%、オセアニアは 4%増加したが、アジアは 6%、アフリカは 2%、ヨーロッパは 1%減少した。鉱山稼働率は 83.1%から 82.3%にやや低下した。

地金生産の内訳は一次生産が 0.9%減少、二次生産は 1.6%増加した。国別には、チリがチュキカマタ製錬所の環境改善工事に伴う操業停止を主因に 9%減少した。ザンビアは電力供給途絶、製錬所の操業トラブルや一時閉鎖に加え、2019 年 1 月 1 日付で銅精鉱に輸入関税(5%)が導入されたことなどから 38%減少した。インドはツーチコリン製錬所が 2018 年 4 月から操業を停止していることにより 24%減少。その他主要生産国では日本、ペルー、米国、一部のヨーロッパ諸国が定修閉鎖のため減少。中国は能力増強を背景に増加。オーストラリア、ブラジル、イラン、ポーランドは前年の供給障害による減産の反動から増加した。地域別には、アジアが 2.5%、オ

セアニアは 10%増加したが、北米は 2%、ラテンアメリカは 7%、アフリカは 10%、ヨーロッパは 2%減少した。精製工場の稼働率は 86.0%から 83.0%に低下した。

地金消費は中国の見掛け消費(未報告在庫の増減を除外)がネット輸入の 8.5%減少が国内生産増に相殺されて 2%増加した。その他主要消費国のなかでは米国、インド、台湾が増加、EU、日本は減少した。中国を除く世界は 3%減少した。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

2/3 640 2/6 670 2/18 680 2/25 670 3/2 640

2. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2020年1月分=令和2年1月分)

生産 : 137,100t (前月比 6.4%増、前年比 2.9%増)

出荷 : 120,700t (前月比 0.1%増、前年比 0.3%増)

在庫 : 114,600t (前月比 16.6%増、前年比 0.5%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2020年1月の銅地金生産は前月比 6.4%増、前年同月比 2.9%増の 137.1 千tとそれぞれ2か月連続と、12か月ぶりの増加となった。出荷は前月比 0.1%増、前年比 0.3%増の 120.7 千tで、それぞれ3か月連続と6か月ぶりの増加。内訳は内販が前月比 11.4%減、前年比 11.2%減の 68.3 千tで、それぞれ2か月連続と7か月連続の減少。輸出は前月比 20.3%増、前年比 20.7%増の 52.5 千tで、それぞれ3か月連続と2か月連続の増加。内販のうち電線向けは前年比 14.9%減の 42.9 千tで4か月連続の減少、伸銅品向けは 7.6%減の 22.5 千tで10か月連続の減少。在庫は前月比 16.6%増、前年比 0.5%増の 114.6 千tと、それぞれ2か月連続と2か月ぶりの増加となった。

3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、2020年1月の銅電線出荷は前月比 4.6%減、前年同月比 1.3%減の 54.1 千t(推定)と前年比は4か月連続で減少した。うち内需は前年比微減の 53.0 千tで4か月連続の減少、輸出は 39.7%減の 1.1 千tで再び減少に転じた。内需の部門別には、建設電販、自動車、電力が2か月連続、通信は2か月ぶりの増加、電気機械は17か月連続、その他内需は4か月連続の減少となった。

日本伸銅協会によれば、2020年1月の伸銅品生産は前年同月比 7.3%減の 57.9 千t(速報)と14か月連続の前年比減となった。品種別には、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条が 12.1%減、自動車端子向けの黄銅条は 17.5%減とともに12か月連続の減少となった。コネクタ向けの青銅板条は 7.8%減で18か月連続の減少、エアコン向けの銅管は 0.5%増と6か月ぶりに増加に転じた。

鉛

【海外】

2020年2月のLME鉛相場は新型コロナウイルス感染が日増しに拡大するなか前年5月以来の低水準となる\$1,800~1,900/t圏を低迷推移した。

新型コロナウイルスの発生源の中国では政府が感染拡大防止策として広範な移動制限や企業閉鎖など規制を強化する一方、経済への悪影響を緩和すべく、人民銀行は大規模な流動性供給を発動した。世界保健機関(WHO)は11日、正式名称を「COVID-19」に決定した。ところが、感染は中国以外にイタリア、イラン、韓国など世界各地で拡大した。こうしたなか、投資家は一斉にリスクオフモードに転じ「セーフヘブン」に逃避したことから、株安が世界的に連鎖した。米国ダウ工業株平均は24日から暴落しはじめ、27日には1,190.95ポイントと過去最大の下げを記録、28日の終値は25,409ポイントと7営業日連続の下落で、週間(5営業日)での下げ幅は2,583ポイントと2008年のリーマンショック後を超えて過去最大となった。一方で、米国の10年債利回りは1.14%と過去最低を更新し、金先物は2013年3月以来となる\$1,600/toz台に乗せた。27日現在、中国本土の感染者数は78千人以上、うち死者数は2,740人、中国以外の感染者数は3.6千人以上に達した。こうしたなか、WHOは28日、世界的に広がる危険度を「非常に高い」に引き上げた。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2019年の世界の鉛鉱石生産は4,706千t、地金生産は11,752千tで前年比横ばい、消費は1.1%減の11,744千t、地金需給は前年同期の▲73千tから+8千tへと供給余剰に転じた。地金の報告在庫は385千t、在庫/消費比率は1.7週間で横ばいとなった。

鉱石生産はアメリカが2.7%、ヨーロッパは1.5%、オセアニアは9.7%、アフリカは7.1%増加、アジアは1.9%減少した。国別にはヨーロッパ、オーストラリア、カナダ、メキシコ、ペルー、南アフリカが増加したのに対し、中国、ボリビア、カザフスタンは減少した。地金生産はアフリカが9.6%増加、アジア、アメリカ、ヨーロッパは横ばい、オセアニアは49.7%減少した。国別にはインド、メキシコ、米国が増加したのに対し、カザフスタン、ポートピリー製錬所が操業トラブルに見舞われたオーストラリア、2018年末にパルパラ製錬所が閉鎖されたアルゼンチンは減少した。二次生産比率は前年の62.5%に対し63.5%となった。地金消費はヨーロッパ、オセアニアが横ばい、アジアは1.2%、アメリカは1.1%、アフリカは3.3%減少した。自動車生産の停滞を背景に中国、日本、米国が減少した。

中国は鉱石生産が1.7%減の2,058千t、精鉱輸入は35.9%増の938千t、地金生産は4,908千tで横ばい、地金のネット輸入は4.8%減の118千t。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は1.8%減の4,887千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

1/6	265	1/10	268	1/17	277	1/28	274	2/3	271	2/7	268
2/18	271	3/2	267	3/6	263						

2月 は LME 鉛相場が月央にかけて上昇したが、鉛建値の値動きは小幅に留まった。

2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2020年1月分=令和2年1月分)

生産	:	17,611t	(前月比 5.9%増、前年比 2.6%増)
出荷	:	18,407t	(前月比 10.4%増、前年比 25.0%増)
在庫	:	17,665t	(前月比 4.9%減、前年比 11.1%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

1月の生産は前月比、前年同月比とも増。出荷は蓄電池向けの需要期での低迷にもかかわらず、輸出が増加したことで、前月比、前年同月比とも大幅増。在庫は前月比減だが、前年同月比は7か月連続の増。

3. 需要部門動向

12月の自動車生産台数は前年同月比8.5%減の725,296台となり、3か月連続で前年同月を下回った。乗用車は前年同月比3か月連続のマイナス、トラックも同5か月連続のマイナスだが、バスは同4か月連続のプラスとなった。2019(令和元)年の自動車生産台数は前年比0.5%減の9,684,294台と3年ぶりに前年実績を下回った。乗用車は4年ぶりのマイナス、トラックも3年ぶりのマイナスとなったが、バスは4年ぶりに前年実績を上回った。

2020年1月の自動車輸出台数は前年同月比7.6%減の334,800台となり、4か月連続で前年同月を下回った。

一方、12月の二輪車生産台数は前年同月比3.9%減の51,244台と3か月連続で前年同月を下回った。2019(令和元)年の二輪車生産台数は前年比13.0%減の567,376台と前年を大幅に下回った。

(一社)電池工業会の調査によると、12月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で2,430千個(前年同月比8%減)と3か月連続で低下し、自動車用以外の鉛蓄電池も556千個(同10%減)とこちらも3か月連続で低下した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで2,986千個(同8%減)と両販売向けと同じく3か月連続で低下した。

一方、2019(令和元)年の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で24,248千個(前年比3%減)と4年ぶりに低下、自動車用以外の鉛蓄電池も7,141千個(同3%減)と2年連続で減少した。その結果、鉛

蓄電池の総出荷は 31,389 千個(同 3%減)と 2 年連続で低下した。

2019(令和元)年の自動車用鉛蓄電池生産(鉛量 t ベース)は 3 年ぶりに低下、2016 年以來の 200 鉛量千 t 台割れとなった。

鉛関連製品生産統計

		11 月	12 月
自動車	数量(台)	804,523	725,296
	前年同月比(%)	90.7	91.5
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	16,871	16,814
	前年同月比(%)	89.6	96.0

2019(令和元)年暦年生産計:自動車 9,684,294 台(前年比 0.5%減)、自動車用鉛蓄電池 192,425 鉛量 t(前年比 4.6%減)。

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

亜鉛

【海外】

2020 年 2 月の LME 亜鉛相場は新型コロナウイルス感染が日増しに拡大するなか前年 12 月以來の安値となる \$2,000~2,200/t 圏を低迷推移した。

新型コロナウイルスの発生源の中国では政府が感染拡大防止策として広範な移動制限や企業閉鎖など規制を強化する一方、経済への悪影響を緩和すべく、人民銀行は大規模な流動性供給を発動した。世界保健機関(WHO)は 11 日、正式名称を「COVID-19」に決定した。ところが、感染は中国以外にイタリア、イラン、韓国など世界各地で拡大した。こうしたなか、投資家は一斉にリスクオフモードに転じ「セーフヘブン」に逃避したことから、株安が世界的に連鎖した。米国ダウ工業株平均は 24 日から暴落しはじめ、27 日には 1,190.95 ポイントと過去最大の下げを記録、28 日の終値は 25,409 ポイントと 7 営業日連続の下落で、週間(5 営業日)での下げ幅は 2,583 ポイントと 2008 年のリーマンショック後を超えて過去最大となった。一方で、米国の 10 年債利回りは 1.14%と過去最低を更新し、金先物は 2013 年 3 月以來となる \$1,600/toz 台に乗せた。27 日現在、中国本土の感染者数は 78 千人以上、うち死者数は 2,740 人、中国以外の感染者数は 3.6 千人以上に達した。こうしたなか、WHO は 28 日、世界的に広がる危険度を「非常に高い」に引き上げた。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2019 年の世界の亜鉛鉱石生産は前年比横ばいの 12,897 千t、地金生産は 2.8%増の 13,537 千t、消費は 13,726 千tで横ばい、地金需給バランスは前年同期の ▲522 千tから ▲189 千tへと供給不足

幅がやや縮小した。地金の報告在庫は 9.0%減の 815 千t、在庫/消費比率は 3.4 週間から 3.1 週間へとやや低下した。

鉱石生産はオセアニアが 15.3%、アフリカは 18.6%増加、アジアは横ばい、ヨーロッパは 2.1%減少した。国別にはオーストラリア、南アフリカ、カナダ、中国が増加、アルゼンチン、チリ、インド、カザフスタン、ペルー、トルコ、米国は減少した。地金生産はアジアが 5.7%増加、アメリカは横ばい、ヨーロッパは 3.8%、オセアニアは 5.6%、アフリカは 3.0%減少した。国別には中国、メキシコ、ペルーが増加、オーストラリア、カナダ、インド、カザフスタン、フランス、オランダ、2018 年 10 月にウラジカフカス製錬所が永久閉鎖されたロシアは減少した。消費はアメリカが 4.5%増加、アジア、アフリカは横ばい、ヨーロッパは 3.3%、オセアニアは 1.9%減少した。国別には中国、米国が増加、日本、韓国、ドイツ、ノルウェー、ロシア、英国は減少した。

中国は鉱石生産が 1.0%増の 4,371 千t、亜鉛精鉱輸入は 11.4%増の 1,503 千t、地金生産は 8.8%増の 6,171 千t、地金のネット輸入は 21.6%減の 543 千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は 1.1%増の 6,597 千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

1/9	313	1/17	319	1/22	322	1/27	307	2/3	292	2/6	295
2/12	286	2/19	283	2/25	274	3/2	268	3/5	262		

2 月は LME 亜鉛相場が月末にかけて続落したことで、亜鉛建値も低落基調を辿った。

2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2020 年 1 月分=令和 2 年 1 月分)

生産	: 46,388t	(前月比 2.7%減、前年比 6.8%減)
出荷	: 40,330t	(前月比 8.3%減、前年比 1.3%減)
在庫	: 76,178t	(前月比 8.7%増、前年比 10.6%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

1 月の生産は前月比、前年同月比とも減。前年同月比は 3 か月連続の減。前年比は 3 か月プラスのあと、3 か月連続のマイナス。出荷は、輸出が健闘したものの、内販が全体的に低下したことで、前月比、前年同月比とも減。前年同月比は 4 か月連続の減。状況に変化はなく、停滞状況が続く。在庫は出荷減から前月比、前年同月比とも増。前年同月比は 5 か月連続の増。

3. 需要部門動向

1 月の鉱工業生産指数は前月比 0.8%増、前年同月比 2.5%減の 99.6(季節調整

済、2015年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は2か月連続の上昇、前年同月比は4か月連続で低下した。自動車などの生産が増えたが、半導体関連などの輸出品目は低調で、2019年10~11月の大幅な低下からの戻りは鈍い。2~3月も新型コロナウイルスの影響で生産計画よりも下振れする可能性が高まっている。しかしながら、経産省は生産の基調を「弱含み」から「一進一退ながら弱含み」に変更した。

生産指数は15業種中8業種が上昇した。上昇への寄与が最も大きかったのが自動車で前月比5.5%増えた。国内・海外向けともに増産となった。一方、半導体製造装置などの生産用機械は同3.4%減、汎用・業務用機械も同2.8%減となった。

1月の出荷指数は前月比0.2%増の96.9と2か月連続の微増、前年同月比は3.7%減と生産指数と同じく4か月連続で低下した。

一方、在庫指数は前月比1.5%増の105.8、在庫率指数は前月比1.5%減の115.0となった。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、2月が前月比5.3%の上昇、2月は同6.9%の低下を見込んでいる。

12月の亜鉛めっき鋼板生産は前年同月比が3か月連続の減、2019(令和元)年の同生産も2年連続の減。2019年の生産は1986(昭和61)年以来33年ぶりの1,000千t台割れ。

12月の伸銅品生産量は59,812t(確報値、以下同じ、対前年同月比▲8.7%)、(対前月比▲3.0%)、対前年同月比は13か月連続のマイナス(10月▲13.9%、11月▲13.9%)。全14品種中、対前年比プラスは銅板、黄銅板の2品種。

黄銅製品では、黄銅条が7,364t(対前年比▲16.1%)、11か月連続の対前年比マイナス。車載分野の調整に加え、民生用コネクタ分が低調。黄銅棒は14,200t、5か月連続の対前年比マイナス(対前年比▲6.2%)。住宅設備関連需要の低調が続いている。

2019(令和2)年の黄銅製品の生産は4年ぶりに前年実績を下回った。同年の亜鉛ダイカスト生産は2年連続の前年比マイナス、亜鉛華生産も3年ぶりのマイナスといずれも低調だった。

亜鉛関連製品生産統計

		11月	12月
亜鉛めっき鋼板	数量(千t)	778	735
	前年同月比(%)	91.3	86.7
黄銅製品	数量(t)	25,417	24,784
	前年同月比(%)	85.3	90.2
亜鉛ダイカスト	数量(kg)	1,388,942	1,339,510
	前年同月比(%)	86.4	87.9
亜鉛華	数量(t)	5,256	4,479
	前年同月比(%)	88.9	94.6

2019(令和元)年暦年生産計:亜鉛めっき鋼板 9,740 千 t(前年比 6.8%減)、黄銅製品 310,414t(前年比 9.1%減)、亜鉛ダイカスト 17,563,191 kg(前年比 8.0%減)、亜鉛華 60,648t(前年比 3.5%減)。

(出所:(一社)日本鉄鋼連盟、経済産業省生産動態統計調査)